

宗教の他者認識——宗教的共存思想の比較思想——

保坂俊司

比較思想学会第四回学術大会（中央大学開催）のテーマである「宗教の他者認識——宗教的共存思想の比較思想」においては、比較思想の研究対象として「宗教」を如何に扱うことができるか、あるいは如何に扱うべきか、更にはその現代的意義について検討する。

数年来の世界的な傾向は、IS（イスラム国）の出現に始まり、世界的なテロリズムの猛威、あるいは難民移民問題の深刻化によって引き金が引かれた自国第一主義、つまりブレグジットからトランプ政権の成立などに象徴される、自利主義的思考への急激な傾倒である。しかも現代社会においては、この悪しき自利主義への明確な対応への道は、未だに見いだせていないように思われる。

この世界的な対立の背景には何があるのか、ということであるが、基本的には相互不信がその根本にある、というのが提案

者の考えである。特に現代問題の背後には、急激なグローバル化を伴った高度情報化社会に対応しきれない多くの人間の困惑があるのではないか。経済的な格差などが生み出した貧困、移民、難民の存在は、身近な脅威となつて欧米の閉鎖的なナショナリズムを増強しているし、虚実入り混じった過剰な情報の氾濫は、人々の心を一層相互不信に駆り立てている。そしてその不安解消の依り所として宗教が再び大きな存在としてクローズアップされている。

このような状況から、前述の国際的な諸問題が発生しているのではないだろうか？ つまり、現代社会は、テクノロジーの発達に対して、思想的な領域における対応が追いつかず、その結果相互不信があらゆる方面で増幅されている状況である、ということではないだろうか。その意味では、重要なことは今更ながら相互理解を深めることであるが、そこに大きな問題が生

じている。特に西洋近代文明が矮小化してきた「宗教」の存在の位置づけの問題がある。

周知のように西洋文明は、宗教と日常世界との分離、理性主義的な思考による社会の建設を目指して宗教（この場合はキリスト教）を、矮小化することでこれを推進した。しかし、昨今の世界情勢は、この西洋近代文明の宗教観の限界を示している。つまり現代の国際社会の状況はイスラムの存在が象徴するように、宗教の存在が依然として人類社会に大きな存在感を持つという現実を再認識しなければならない状況にあるのである。

本大会では、対立や紛争の大きな要因となっている相互不信の解消のために、比較思想は如何なる貢献が可能かという問いについて検討することにある。

というのも比較思想の原点に立ち戻ってみると、比較思想の根本には、本学会の初代会長である中村元博士の「比較思想論は、まさに、平和への道の扉を開ける鍵として、世界平和への足固めとして役立つものである」という基本認識があり、更に「人類の平和と幸福という目的を達成するには、世界諸民族の相互の理解を促進しなければならないが、それを実現するために、比較思想研究をさらに一歩発展させる必要がある」という傾聴すべき言葉がある。

つまり、比較思想という学問は、人類の平和共存社会構築に資することを目指す学問である、という基本的な方向性を持つ

ていることになる。この一見過剰とも云える表現の背後には、中村博士はじめ本学会の創設メンバーの第二次世界大戦への深い反省がある。故に、比較思想の根本には、思想研究を通じて、平和的社会の建設に貢献するという決意があり、これこそ比較思想の根本を為すものである。

勿論、そのためには比較思想においては、その方法論が重要となる。この点を、末木剛博博士は、比較思想の方法論においては「抽象的な議論のうちに遊離させてしまう危険を冒す主観的な恣意」ではなく、「冷静公正な客観的立場を基本とする実証主義」が重視されねばならない、と述べている。つまり、比較思想の研究法は、現実社会を見据えた上で、冷静かつ中立的、更に論理的でなければならないが、しかし、更にその方法論と共に、高い理想と偏りの無い視点を併せ持った実証的な議論が不可欠である、ということである。

いずれにしても、比較思想が、宗教の領域を扱う時、この点を堅持しつつ、その理想を追求することは、現代社会の要請に応え得る可能性を持っている、と確信できる。

今こそ、改めて比較思想の根本の理念に沿って、平和社会の構築へ資するためにも、宗教を前述の比較思想の視点から積極的に検討し、社会にその成果を発信すべき時ではないだろうか。

(ほさか・しゅんじ、比較思想、中央大学教授)